ウ．ウェストミンスター信仰告白書による、誤り等々に対する論駁

ウェストミンスター信仰告白書を作成した時、改革神学の範疇で、英国、スコットランド、アイルランドは勿論のこと、海外の改革教会も共感できることに焦点を置きました。従って、論争的なことは意図的に避け、場合によっては、その用語にも折衷しました。そうしながらも、正確で明白に改革信仰の叙述をしました。これは、総会の方向を設定させてくれた「厳粛同盟と契約」（1643）に影響を受けたからです。「厳粛同盟と契約」は、改革信仰を保全して、一番最高の改革教会模範に該当する改革信仰を打ち立てるのが急務だとしました。[54] このような目的の下で、総会員たちは、ウェストミンスター信仰告白書を作成することにおいて、決して受け入れられない誤り等々がありました。従って、総会員たちは、ウェストミンスター信仰告白書を作成しながら、改革神学の範疇に入れることのできない神学と誤りに対して論駁しました。ウェストミンスター信仰告白書が誤りと見なしてそれを論駁したのは、ローマカトリック主義、アルミニウス主義、道徳律廃棄論主義、ソッツィー二主義等でした。[55]

54　Samuel Gardiner ed., *The Constitutional Documents of the Puritan Revolution 1625-1660* (Oxford: Clarendon Press, 1958), 268.

55　以外にも、クエーカー主義と再洗礼派も論駁しました。ウェストミンスター信仰告白書１章では、直接啓示の持続性を強調するクエーカー主義を論駁し、ウェストミンスター信仰告白書７章５項では、契約の連続性を否定する再洗礼派を論駁しました。そして、20 章の良心の自由からも再洗礼派を論駁しました。

1）ローマカトリック主義

エリザベス女王時代から、ほとんどすべての清教徒たちはローマカトリック主義の誤りについて論駁しました。1578 年ジョン・レイノルズ（John Reynolds）は、ローマカトリック主義との論争を始めとして、その当時の教皇主義者として有名だった、ロバート・ベラルミン（Robert Bellarmine)と論争しました。[56] そして、1583 年にトマス・カートライトは、ローマカトリックの誤りと迷信的な等々を細かく掘り下げる作品を出版しながら試みました。[57] また、1603 年にジョージ・ダウナム（George Downame）は、「A Treatise concerning Antichrist(反キリストに関する論拠）」を出版し、ローマカトリック教会が反キリストの会衆だとしながら、ベラルミンに対して反駁する論証をしました。[58] ウィリアム・パーキンスは、改革教会とローマカトリック教会が異なることを論証する「A Reformed Catholike(改革不変教会）」を 1597 年に出版し、ジェームズ・アッシャーは 1624 年、教皇主義者たちに対して論駁する「An answer to a challenge made by a Jesuit in Ireland(アイルランドのイエズス会が行った挑戦への答弁）」を出版しました。[59] 彼らはみな、ウェストミンスター総会会員に影響を与えた者たちでした。さらに、ローマカトリックとの衝突は、ウェストミンスター総会が開かれた状況の中でも継続されました。

---

56 Benjamin Brook, *The Lives of the Puritans* (Morgan: Soli Deo Gloria, 1994 [1813]), 177.

57 Joel Beeke and Randall Pederson, *Meet the Puritans* (Grand Rapids: Reformation Heritage Books, 2006), 131

58 George Downame, *A Treatise Concerning Antichrist Divided Into Two Bookes, the Former, Proving that the Pope Is Antichrist, the Latter, Maintaining the Same Assertion, Against All the Obiections of Robert Bellarmine, Iesuit and Cardinall of the Church of Rome* (Biblio Bazaar, 2010) 参照.

59 Francis Bremer, Tom Webster eds., *Puritan and Puritanism in Europe and America* Vol 1 (Santa Barbara: Abc Clio, 2006), 254.

従って、総会員たちは、会議の中で彼らを教皇主義者 (papist)と呼びながらローマカトリック教会の誤りについて論議し、それは、改革信仰と決して共にすることができないことを宣言しました。[60] 総会員たちは、教皇主義者、あるいは、ローマカトリックを偶像崇拝的と見ました。従って、ウェストミンスター信仰告白書には、教皇主義を排撃する内容が少なくありません。

ウェストミンスター信仰告白書１章 3 項での言及は、外典と教会の伝統を信仰と信仰の規則にする、ローマカトリックに対する論駁です。そして、ウェストミンスター信仰告白書 6 章 5 項は、本性の腐敗を信じないローマカトリックの教理を排撃しています。ウェストミンスター信仰告白書 11 章１項と 2 項は、信仰義認教理を最も曲げてしまったローマカトリックの誤りをさらけ出すことであり、14 章 2 項は、聖書に啓示された真理に同意することを信仰と見るローマカトリック教会の誤りを明らかにしています。ウェストミンスター信仰告白書 15 章 3 項では、告解、あるいは、苦行を通して罪を保証して貰える行為を悔い改めと考える、ローマカトリックの誤りを拒否しています。[61]

ウェストミンスター信仰告白書 16 章 3-5、7 項は、善行を救いの根拠と見るローマカトリック教理に反対する直接的な叙述です。ウェストミンスター信仰告白書 20 章 2 項で、「神は、ご自身の御言葉に反する人間の教理と命令は勿論、礼拝や信仰に関する問題とに関連して、良心を自由にさせたこと」として説明していますが、これは、聖書を根拠とせずに礼拝儀式を強要する、ローマカトリックの誤りに対する直接的な論駁の言葉です。このような論駁は、ウェストミンスター信仰告白書 21 章 1、2 項の礼拝に対する説明でも継続されました。

---

60 Alex Mitchell ed., *Minutes of the Sessions of the Westminster Assembly of Divines*, 264.

61 Robert Shaw, *An Exposition of the Confession of Faith of the Westminster Assembly of Divines,* 158.

そして、ウェストミンスター信仰告白書21章4項の死人のために祈ってはならないという条項も、ローマカトリックの誤りに対する指摘です。また、ウェストミンスター信仰告白書27章の礼典、28章の洗礼、そして29章の晩餐は、ローマカトリックの教理が危険な誤りだと証しし、29章4-8項では化体説を誤りとしました。

2）アルミニウス主義

英国教会でアルミニウス主義は、16世紀末、ケンブリッジ大学のウィリアム・バレット（William Barett)から始まりました。勿論、ジェームズ1世が、カールトン（Carlton）、ホール（Hall）、ダヴェナント（Davenant）、ウォード（Ward）を、アルミニウス主義を論駁するドルト会議（Dort Synod、1618-1619）に派遣しましたが、それは形式的なことでした。この当時、すでに、アルミニウス主義は、英国国教会に相当な影響を及ぼしていました。[62]その証拠として、ジェームズ1世は1622年に指針書を発行しましたが、予定論、選び、遺棄、そして不可抗力恵みの教理などについて説教できなくさせる規定をしたのでした。そして、1624年にリチャード・モンタギュー（Richard Montagu,1577-1641)は、「A New Gagg for an old Goose(古いガチョウのための新しいギャグ)」を出版したのですが、カルヴァン主義に反対する論文でした。

ジェームズ1世が死に、その息子チャールズ1世が1625年に即位しますが、この時ウィリアム・ラウド（William Laud)は、チャールズ1世の助力者となりました。ラウドは1633年カンタベリー大主教となりますが、徹底したアルミニウス主義者でした。従って、この当時、英国国教会は、

---

62 Nicholas Tyacke, *Anti-Calvinists: The Rise of English Arminianism* (Oxford: Clarendon Press, 1991), 4章 参照。

ラウドの影響力の元でアルミニウス主義とローマカトリックの儀式が混ぜ合わせられた、ラウド主義 (Laudianism) に従っていました。[63] ラウド主義に対抗していたスコットランド長老教会は、1638 年に国民契約を結びました。そして、1643 年には、スコットランド、アイルランド、イングランド教会が「厳粛同盟と契約」を結び、ラウドとチャールズ 1 世に対抗します。このような背景で開かれたウェストミンスター総会は、当然、アルミニウス主義の誤りに対して徹底して論駁するしかありませんでした。

従って、ウェストミンスター信仰告白書の章の中には、アルミニウス主義を論駁している内容等々が多いのです。神の聖定に対する説明をしているウェストミンスター信仰告白書 3 章は、優先的に神の聖定を条件的に見て、神の選びに反対するアルミニウス主義を論駁するものです。[64] そして、ウェストミンスター信仰告白書 7 章 2 項では、アダムが人類の代表者という命題を拒否するアルミニウス主義に対する叙述です。ウェストミンスター信仰告白書 9 章の自由意志では、悔い改めにおいて人間の意思を強調するアルミニウス主義に対して排撃しているのです。続けてウェストミンスター信仰告白書 10 章 2 項では、聖霊の有効な御業とそれの不可抗力的なことを説明していますが、それは、聖霊の働きが人間の自由意思にかかっているという、アルミニウス主義を論駁することでした。[65] ウェストミンスター信仰告白書 11 章 2 項において、信じる行為が義と認められる根拠だというアルミニウス主義に対して、「神は、信仰自体や、信じる行為や、それ以外、他の福音的な従順を彼らの義と認められず」という言葉によって排撃しています。[66]

---

63 Nicholas Tyacke, *Anti-Calvinists: The Rise of English Arminianism,* 246, 247.

64 Robert Shaw, *An Exposition of the Confession of Faith of the Westminster Assembly of Divines,* 41.

65 *Robert Shaw, An Exposition of the Confession of Faith of the Westminster Assembly of Divines,* 121.

66 Robert Shaw, *An Exposition of the Confession of Faith of the Westminster Assembly of Divines*, 128.

ウェストミンスター信仰告白書 17 章の聖徒の堅忍教理は、アルミニウス主義を直接的に論駁することであり、18 章 1，2 項の救いの確信に対する説明で使用された「偽りの希望（falsehopes,fallible hope)」という用語は、有効な御業に反対し、自ら信仰を持つことで、救われたと考えるアルミニウス主義に反対する強力な言葉でした。

３）道徳律廃棄論主義

1630 年代から英国教会内に、道徳律廃棄論主義者たちが起こされ始めました。ジョン・イートン（John Eaton)は、道徳律廃棄論主義者として 1630 年代の初から教えることを始め、トビアス・クリスプ（Tobias Crisp)、ジョン・シンプソン(John Simpson)、ジョン・ソルトマーシュ(john Saltmarsh)が、イートンに続いて道徳律廃棄論主義を教えました。[67] イートンは 1642 年に、「Honeycomb of Free Justification by Christ Alone(ただキリストによる値なしに与える義認の蜂の巣)」という本を出版し、それによって道徳律廃棄論主義者は英国教会で拡大一路にありました。従って、ウェストミンスター総会は、英国教会で流行し始めた道徳律廃棄論主義について集中的に論議しました。[68] この論議で卓越な役割をしていた者は、ガタカー（Gataker）でした。[69] 勿論総会員だったアンソニー・バージェス（Anthony Burgess）は、総会期間中「Vindiciae Legis: or A Vindication of the Morall Law and The Covenants, From the Errours of Papists, Arminians,Socinians,and more especially,Antinomians（律法の請求,1646)」、

---

67 Francis Bremer, Tom Webster eds., *Puritan and Puritanism in Europe and America* Vol 2: 306.

68 この論争は､贖いの範囲に対することでした。(李殷善, ウェストミンスター信仰告白書 救済論 参照)

69 Alex Mitchell ed., *Minutes of the Sessions of the Westminster Assembly of Divines*, xxxiv.

「The True Doctrine of Justification Asserted and Vindicated from Errours of Papist,Arminians,Socinians, and more especially Antinominas（真の義認教理,1646)」を出版して、道徳律廃棄論主義が誤りであることを明確にしました。ウェストミンスター信仰告白書は、道徳律廃棄論主義をさらに注意深く扱いましたが、７章 5 項では、律法を恵み契約として説明しながら道徳律廃棄論主義を論駁し、11 章では、義認教理と関連して道徳律廃棄論主義の誤りを明らかにしています。[70]

ウェストミンスター信仰告白書 13 章は、聖化を選び事項として見ている道徳律廃棄論主義が誤りであると明確にしていますが、19 章全体は勿論で、特に 19 章 5 項では、「道徳法は、義と認められている人は勿論、他のすべての人に服従を要求する」という叙述は、直接的に道徳律廃棄論主義を論駁するものです。

４）ソッツィー二主義

ソッツィー二主義は、清教徒たちを脅かした誤りです。1614 年にソッツィー二派教理書である「Racovian Catechism（ラコヴィアン・カテキズム）」が英国で燃やされました。しかし、ソッツィー二主義は続けて流行して、1640 年代と 1650 年代にも、ソッツィー二派教理書を火あぶり式に燃やされることもありました。ソッツィー二主義に対する警戒は、1642 年に清教徒であったジョージ・ウォーカー（George Walker）が、キリストの義が信者に転嫁されることを否定するジョン・グッドウィン（John Goodwin）に対する告発によって触発されました。ソッツィー二主義に対する警戒は、1642 年に清教徒だったジョージ・ウォーカー（George Walker）による、キリストの義が信者に転嫁されることを否定するジョン・グッドウィン（John Goodwin）に対する告発によって触発されました。そして、1643 年にも、清教徒だったフランシス・シェイネル（Francis Cheynell）、

---

70 Alex Mitchell ed., *Minutes of the Sessions of the Westminster Assembly of Divines*, Ixv.

トーマス・エドワーズ(Thomas Edwardes)が、ソッツィー二主義が誤りであることを明らかにしました。それにも関わらず、聖霊の神性を否定した、ソッツィー二派主義者であったジョン・ビドル（John Biddle）の教えは流行りました。彼は結局、監獄に投獄されましたが、1647 年にソッツィー二主義の冊子を発行し、議会はその書を燃やすようにと命令しました。[71]

このようにソッツィー二主義は、総会期間中でも強力な誤りとして影響を及ぼしていたのです。従って、総会員だったバージェスは、ソッツィー二主義が誤りであることを強調しながら、ウェストミンスター信仰告白書は、このようなソッツィー二主義を論駁するとの内容を含めました。先ず、ウェストミンスター信仰告白書 2 章は、キリストの神性と聖霊の神性を否定するソッツィー二主義を論駁したものであり、3 章 2 項は、神の聖定が一時的だと主張するソッツィー二主義に対する論駁でした。[72] ウェストミンスター信仰告白書６章６項は、死が罪の刑罰ではないというソッツィー二主義を排撃しています。ウェストミンスター信仰告白書 11 章は、ソッツィー二主義が誤りだというのをさらけ出すことによって、１項と 2 項では、義認を罪の赦しの意味だけに極限させるソッツィー二主義を論駁しながら、[73] 3 項では、キリストがご自分の民の代わりに神の公義を完全に、そして充分に満足させたことを否定するソッツィー二主義に反対しています。[74]

---

71 Francis Bremer, Tom Webster eds., *Puritan and Puritanism in Europe and America* Vol 2: 309, 310.

72 Robert Shaw, *An Exposition of the Confession of Faith of the Westminster Assembly of Divines,* 41.

73 Robert Shaw, *An Exposition of the Confession of Faith of the Westminster Assembly of Divines,* 126.

74 Robert Shaw, *An Exposition of the Confession of Faith of the Westminster Assembly of Divines,* 133.